

## 若き(??)研究主宰者(PI)の悩みと喜び

岡山大学大学院保健学研究科 渡辺 彰吾

今回 SHR 共同研究会より、疾患モデル通信の巻頭言の依頼があったときに真っ先に表題のことを思いました。そもそも研究主宰者 (PI: Principal Investigator)とは何なのか?改めて文部科学省が定めるPIの定義を見ると、1)独立した研究課題と研究スペースを持つこと、2)研究グループの責任者であること、3)大学院生の指導に責任を持つこと、4)論文発表の責任者であること、などと書かれています。私は岡山大学大学院保健学研究科を修了後、帝京大学医学部助教、東京大学病院循環器内科非常勤研究員、名古屋大学医学系研究科助教などを経て、母校である岡山大学大学院保健学研究科(図1)に准教授として戻ってきました。たくさんの尊敬する先生方の指導のもと、温室育ち(??)で研究をさせてもらってきて、ポンとPIとして独立してしまったのです。私はPIとしてまだまだ未熟ですが、その苦悩と喜びについて書きたいと思います。



図1 岡山大学大学院保健学研究科の保健系学生が通う(通称)保健学科棟

母校の岡山大学に戻ってきて、最初に悩んだのはテーマの設定です。前職の名古屋大学では食塩感受性高血圧ラット由来のメタボリックシンドロームモデルを使い、アディポサイトカインと心筋炎症の研究を行ってきました。新しいテーマであり、かつ、培ってきた技術を活かすことを考えていて出会ったのが、非アルコール性脂肪肝炎を発症する SHRSP5/Dmcr (以下 SP5)モデルでした。私はわりと厚かましい性格で、思いついたらすぐに行動してしまいます。ざっと下調べの後に SHR 等疾患モデル共同研究会に問い合わせ、北森理事に電話で色々と質問したのを覚えています。さて、NASH と循環器系疾患の関連を調べるというメインテーマはわりとすぐに決まりましたが、もう一つPIの大事な役目は研究費の管理です。SP5は1匹〇〇円で、それが〇〇匹必要で、HFC食は〇〇円で・・・などと換算していると、あっという間に科研費の年間予算ギリギリまで来てしまいました。自分で研究費の管理をすると、一つの研究を自分1人で完結するのにどれだけお金がかかっているのか実感できます。それ以降、民間助成金を見つけては応募するルーチンが新たに加わりました。この問題は定年を迎えるまで悩み続けることになるだろうと思います…。

## ○目次

巻頭言	.....P1
理事会報告	.....P2
お知らせ	.....P5



図2 筆者(渡辺:写真真ん中)と研究室の学生

苦悩の方は書いたらキリがありませんが、喜びも多くあります。PIの仕事の1つでもある大学院生の指導を通して彼らの成長を実感することです。2021年4月では、私の研究室には2名の博士学生、3名の修士学生、1名の留学生がいます(図2)。私の研究室の学生は、例えば将来、大学教員になりたい、企業の研究職につきたい、超音波検査士の認定資格を得たいなどの目的を持ってやってきます。むしろ、そういうしっかりとした将来ビジョンを語ってくれる学生しか受け入れないようにしています。将来のビジョンがあると、それに向かって大学院の2年間、3

年間を彼ら自身がしっかりと努力するようになります。彼らは自分の意思で、修士1年目で英語論文を書き始めたり、資格取得のために市中病院にエコー研修に行ったり、循環器内科との共同研究に参加したりと、たくましく育っています。私は彼らの夢を叶えてあげるために、より良い環境を整えてあげることが仕事だと思っています。まだ、立ち上げて5年目を迎える研究室ですが、大学院生がFirst authorで私がCorresponding authorとなった論文が増えてきたことが喜びです。また、最近では学振DC1にも採択されたり、大学の助教として夢を叶える大学院生も出てきました。PIとしての苦悩は絶えませんが、その分、大学院生を育てる喜びを感じています。研究テーマ立ち上げのきっかけをいただいた、SHR共同研究会のみなさま、家森先生、北森先生にこの場を借りて感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。